【付録】 鎌倉行遊の記録 ―山井崑崙関係の記載を中心に

○享保二年九月二三日～二八日(六日間)

○資料―太宰春台『湘中紀行』、安藤東野『遊湘紀事』、山井崑崙『鎌倉行記』

出立前後

享保二年(一七一七)九月、帰省を機会に、根本伯修は牛門の諸子に鎌倉を案内しようと声を掛けた。「どうです、皆さん、たまにはちょっと出掛けてみませんか。鎌倉はいかがです。お出でになるなら、道案内はお任せ下さい。」(なお、山井崑崙の『鎌倉行記』〔以下「行記」と略記〕では、伯修の父がやってきて勧めたとある。)「諸君好ム レ遊ヲ乎。ソル レ遊バ二鎌倉一。遊バ則チ吾且ツ爲ラント二東道ノ主一。」(太宰春台『湘中紀行』〔以下「湘中」と略記〕)この話を聞くや太宰春台の思いはすでに鎌倉に飛んでいた。同座の安藤東野・朝比奈文淵(字涵徳・号玄洲)21)と崑崙が賛成し、秋元澹園(以正・字子帥)・平野金華(玄中・字子和)も興味を示した。九月二〇日(湘中では一九日、遊湘紀事・行記では二〇日とする。)出立と決めた。しかし前日から生憎の豪雨で、雨は当日も降り続いた。翌日、春台は牛門に皆が集まっているだろうから更めて出立日を相談しようと思って塾を訪れると、誰もいず、晁生(文淵)は折しも足を病んで牀にあり、崑崙は読書に余念がない。(崑崙が「讀書自若」であるという春台の描写はその平生を描いて要を得ている。)他の連中はどうしたのかと尋ねると、昨日東野さんは来ましたが、なにぶんこの雨で他の誰も来なかったので、東野さんと相談して今回の秋の旅行は中止にしましたという。

山生ハ讀書自若タリ。問ヘバ レ之ニ、山生曰ク、前日藤生來レドモ、諸君不レ至ラ。實ニ雨故也。因リテ與二藤生一議シ止メタリ二今秋之行ヲ一矣。(湘中)

春台は大いに不満だった。「これくらいのことでせっかくの行遊を止めてどうする。人生朝は夕べを謀らずだ。機会を逸してはならず、猶予すべきでない。第一、今度の一行で最年少の君にしてからが何をぐずぐずしているのか。一人でも一緒に行くという者がいれば、己は明日にも出掛けるよ。」こう言うと崑崙は「分かりました。私も一緒に行きましょう。東野さんはどうしましょう。私が行って頼んでみますから、あまり急ぐのはよくありません。」と言う。そこで崑崙を東野の許へ伝令に遣ると、やがて戻って来て東野は承知したという。それから東野がやって来た。

東野も病中だったが、春台の意気壮んなのに驚き、一日おいて二三日出発となった。(この辺りのいきさつは東野の『遊湘紀事』といくぶん食い違いがある。次の段落を参照。)金華と須渓(秋子帥)は約に背いてやって来ず、一行は三人と決まった。

東野は病を押して出掛けるはめになったことでもあり、伝令にされてやって来た崑崙の様子を細かく描いている。豪雨の余韻を残すぬかるみの道を崑崙が尋ねてきた。「太宰さんは出掛ける気満々です。太宰さんだけ旅立たせるのも最年少の後輩としてどうなのかというところもあり、私も明日早朝、雨具を持って一緒に行くことにしました。というわけで、ちょっとご挨拶に。」崑崙はそう言いながら、金華・澹園の二人が実に煮え切らないとしきりに話す。それはつまり、言外に自分にも同道してほしいと誘っているのだと東野は気づいたが、わざと気づかないふりをして受け答えをした。崑崙が帰った後、雨脚はおさまり、東天に虹も出た。家人はもうこれからは晴れるだろうという。仕方なく、自分は崑崙を追って出たが、もう言ってしまった跡で、必死に追い掛けたが姿も見えない。牛込の塾を訪ねるとちょうど春台もいて、崑崙と二人で気勢を上げ、こちらの誠意も知らず、自分たちを盛んにこきおろしているところだった。(崑崙は「東野は恐らく来るだろう。」くらいのことは春台に伝えたのだろう。文飾の多いのは詩文を得意とした東野の行文の特徴らしく見える。)

且ツ子ハ於テ二吾ガ輩一最モ少シ。何ゾ用ヰルコトヲ二縮朒(ぐずぐずと躊躇すること)ヲ一爲サン。如シ得バ二一人偕ニ行クヲ一、余則チ以テ二明日ヲ一發セント。山生曰ク、善シ。吾其レ偕ニ行カンニ、不レ有ラ二藤生一者乎。吾請フ就カン レ謀ニ(頼んでみましょう)。子勿カレト レ遽ツルコト。走ラシム二之ヲ東壁氏一。既ニ反ル。曰ク、藤生許諾ス。尋イデ藤生至ル。(湘中)

廿一日薄暮、山生衝イテ レ泥ヲ過リテ レ余ニ曰ク、『太宰遊趣勃勃トシテ(意気壮んで)、不レ可カラ二以テ已ム一。不佞(私)年又最モ少シ。不レ忍ビ レ使ムルニ二太宰ヲシテ獨リ賈ハ一レ勇ヲ(勇者を売り物にする)、約ス二明日質明(黎明、夜明け方)、襏襫(雨合羽)シテ而偕ニスルヲ一。故ニ來リテ辭ス二』云。且ツ説ク切ニ金華・須溪ガ怯ナルヲ二於遊一。意毎ニ在ル余ニ也。余陽ツテ為ス下不ルレ達セ二其ノ意ニ一者ト上。已ニシテ生去ル矣。時ニ雨少シク歇ム。東隅隮スレ虹ヲ。問フ二諸ヲ人ニ一。皆曰ク、且ニ霽ソト矣。余乃チ投ジテ レ袂ヲ(思い切って立ち上がる)追フ レ生ヲ。屐ハ及ビ二于

商丘ニ、簦(竹笠)ハ及ベドモ于黄花陂ニ、(句意未詳。ずいぶん急いだが、の意か。)而不レ能ハレ及ブ一也。至レバ則チ太宰方ニ在リレ堂ニ、與レ生睥睨彈指シ(目を怒らせて爪弾きする)、罵ッテ余輩ヲ不レ已マ。(安藤東野『遊湘紀事』〔以下「遊湘」と略記〕)

こうして九月二三日黎明、三子は牛込に集合した。徂徠が見送ってくれ、先にやって来た東野は崑崙と出掛けた。二人が塾の西にある橋の上で待っていると、春台が遅れて姿を現した。東野がいう。「人と約束をしておきながら、遅れるとは何事か。」春台は答えた。「何と小僧どもめ、己に会うのはまだ早い。」張良と黄石公の故事を引き合いに出して互いに笑い合い、一行は出立した。誰もが箬笠(竹笠。竹で編んだ円錐型の笠)に草鞋履きだったが、春台は襏襫(蓑か。または桐油合羽、引回しの類か)、東野は皮裘(羅紗の合羽、道中羽織の類か)を身にまとい、崑崙は雨着を入れた行李を別に背負っていた。「山生別ニ為リテ一行李ヲ肩ニスレ之ヲ。亦雨ノ備也。余二人嘆ズ其ノ少壮ヲ。」(遊湘)大荷物を背負って、若者は元気なものだという心である。

弘明寺まで

朝日に輝く芝浦の海を過ぎ、級河(品川)の宿駅も過ぎた。大森の薄汚い居酒屋で酒を飲む春台と東野の脇で、崑崙は懐から岡仲錫(岡井嗛洲、別号滄浪)の送別の詩を取り出して二人に示した。ところが崑崙自身は何度も勧められる酒を断わり、糍粑(餅か)(湘中)と柿(遊湘)を食べながら盛んに饒舌るばかりだった。(岡井は元禄一五年(一七〇二)生れなのでこの年まだ一六歳、崑崙は通説では元禄三年(一六九〇)生まれなので二八歳、天和三年(一六八三)生まれの東野は三五歳、延宝八年(一六八〇)生れの春台は三八歳となる。)崑崙は酒を飲まなかった。そして盛んに食べ、その分よく饒舌った。

山生探リ二其懐ヲ一、出ダシ下岡仲錫送ル二吾曹(我々)ヲ一詩ヲ上以テ下スレ酒ヲ(酒を断る)。而シテ己ハ則チ啗フ二糍粑ヲ一。勧ムレドモ二之ニ飲マンコトヲ一、弗レ聽カ(言うことをきかない)。實ニ不レ能ハレ飲ム也。余醉神旺ダ盛ンナリ。同二藤生一和ス二岡ノ詩ニ一。(湘中)

山生探ッテ二懐中ヲ一、出ダス二岡生ガ餞詩ヲ一。與二余二人一下スレ酒ヲ。己ハ自ラ啖フレ柿ヲ。談笑若シレ無キガ人。盖シ生無キノ二酒腸一(酒を飲まない)故也。(遊湘)

(春台・東野の紀行の中には、時々まるで申し合わせたように崑崙の言動の細密な描写が見える。このとき崑崙は和詩を行わなかったらしい。徂徠に扈従して護社のパトロンである猗蘭侯の前で詠んだ半ば公的な詩作が一首残るだけだった崑崙は、恐らく詩を進んで作るタイプではなかったのだろう。この旅では和詩を作ったらしいところもあるが、現存していない。その代わり親しい仲では遠慮会釈なしに饒舌るところがあった。そして同行の二人に和詩を勧めたので、春台は東野にも遠慮せず酔吟を始めたのだったろう。伯修のような武弁のタイプと馬が合ったのも話題に事欠かないところがあったからに違いない。)

東野は談笑の中、崑崙にも酒を注いで旅中の方針を提案した。先の引用に続けて云う。「今度の旅は郊外の野遊びに出掛ける程度のものに過ぎない。とはいえ、他日の遠遊に備えて足馴らしのためでもある。いかにも漫遊の体たらくでのほほんと過ごしては、諸家の嘲りの種となるばかり。そこで貴公等とここに旅の盟約を定めようと思う。法は三章のみ。(劉邦の故事に倣う。)すなわち一日たりとも無駄に過ごさない。疲れたといって訪ねるべき名勝を省かない。馬を傭わない。よろしいか。」あたかも桃園の約のごとく、銘々誓いの酒を酌み交わした。崑崙も我慢して一杯を飲み干し、茶店を出た。(恐らく崑崙の顔を窺いながら、東野は酒を無理強いしたことだろう。)

余把ッテレ爵(酒杯)ヲ属シテ(酒を注いで)二二生ニ一曰ク、此ノ行也、實ニ適クノ二莽蒼(近郊の野原)ニ一類耳。而レドモ為スレ此ヲ者ハ、非ズレ試ムルニ二他日濟渉(マヽ)ノ具(済勝の具。健脚)ヲ一耶。乃チ施施トシテ(のんびり歩く貌)為サバ二壯遊ノ之顔ヲ一、殆ンド笑ハレン二于大方ノ之家ニ一。請ヲ與ニ二君一約セン二法三章ヲ一。曰ク、無ケン二曠日一也。無ケン二以テレ劇(極度の疲労)不ルレ探ラ也。無ケント二以テレ馬ヲ爲サンレ脚ト也。乃チ各歠ル二一爵ヲ一。山生強ヒテ一爵シテ而出ッ。(遊湘)

一行はさらに進み、右に野原、左に海を望みながら東海道の松並木を西へ向かった。どちらも広々と見晴らしが開け、心地よく足を運ばせる。池上本門寺を過ぎ、六合川を渡って右は山がちになり、河崎(川崎)・金河(神奈川)・程谷(保土ケ谷)を過ぎたところで左の弘明寺路に入った。すでに東都を去ること七十余里(中国里程)、崑崙は既にもう疲労の様子である。春台も酒の勢いが切れてきた。といって、田舎道に清酒を扱う店などあるはずもない。「山生疲レタリ矣。余雖モ二猶ホ健ナリト一、酒力已ニ盡ク。因リテ思ヘドモレ飲マント、而村酒不ルレ可カラレ飲ム也。」(湘中)そこで糕(煎餅か)と点心(饅

頭)を賈う店で休憩し、腹を満たして再び元気を取り戻すと、松杉柏栝(柏槙)のために見通しの利かない山道を歩み続けた。途中、出合った農夫に路を問うと根本翁のところへ行く人たちかとかえって問い返された。弘明寺村は蕞爾たる小村なので、士人は根本翁あるのみという。山腹で再び小休止した後、木の根を攀じながら谷間の急坂を下ると道が開け、人里が近づいた。ここで東野と春台が後ろを見ると崑崙がいない。道に迷ったなと思って喚んでみると、しばらくして遠くから声がする。木の根方にうずくまって待っているとやって来た。

廻顧スレバ則チ不レ見ニ山生ヲ一。以テ為ス失レ路ヲ。(略)乃チ見ル下山生ガ解キテ剣ヲ肩ニシレ之ヲ、掛テ二行李ヲ蒯緱(粗末な剣)ノ上ニ一、蹩躠トシテ(びっこを引きながら)降ル上レ厓ヲ。問フレ之ニ、病メル邪ト。曰ク、此レ飢ウル也、非ザレ病ムニ也。且ツ弘明已ニ邇シ。日猶ホ下春(日が昏れかかる頃)ナリ。公等胡為レソ忙シキ乎。且ツ何ソ不ル二行ヶ翫バ一レ勝ヲ耶ト。(遊湘)

雨具を入れた行李を刀に掛け、刀を担い棒のように肩に掛けた崑崙の姿が浮かんでくる。足を引きずっていかにも大儀そうなので、足を痛めたかと聞くと、腹が減ったからで、足が痛いわけではないと答えた。付け加えて崑崙はいう。「それに弘明寺はもうすぐそこでしょう。日もようやく沈み始めたばかりだし、二人ともどうしてそんなに先を急ぐのです。だいいち名所を回りながら行くはずではなかったのですか。」川沿いに二里ほど行くと、道端に榜(表示)があり、二位禅尼(北条政子)の木像があると書してあった。春台は寄って行こうかと言ったが、崑崙はまるで前後矛盾したことを言う。「山生曰ク、ダレ晩カラ也ト。」(遊湘)後でも見られますよ(近いんだし)、というわけで、一行はこの日の目的地である弘明寺の村落まで直行することにした。

根本家の歓待

村には立派な家が一軒あり、そこが根本伯修の家だった。一足先に帰省していた伯修が父親と共に二行を出迎えた。そして蕎麦を打ち、酒となる。春台と東野は東都の芝居の話などで盛り上がったが、崑崙は疲労困憊、起きてもいられない様子で重病人のように横になって眠っていた。皆が酒を勧める度に首を振って断わるので笑われた。ただし、蕎麦を食う時は主人も勧めるが崑崙も遠慮せず人一倍食った。春台と東野は大笑いして言った。「よくそれだけ食えるものだ。おまえさんにはとてもかなわん。」東野はひとえに滑稽さを押し出しているが、先輩たちには酷く調戯われた。さすがに崑崙もこの蕎麦食い競争で面目を施したときの思い出を正直に詳しく書き残している。末尾の廉将軍云々は、魏に亡命した趙の廉頗将軍の帰参が老齢のためにかなわなかった話で、一斗の飯・三斤の肉を平らげ馬に跨がった往年の猛将も、会談中に三度も厠に立ったと使者が趙王に嘘の復命をしたという故事であり、こうした悪謔を言われた側の崑崙でさえ書き遺しているのが洒落でもあり、当時牛門の人々に共通した衒学趣味の表れでもあったのである。

為リ二蕎麦ヲ一、置酒ス。余與二藤生一劇談(ここは芝居の話か。)無シ倦ムコト。山生ハ則チ疲レ甚ダシク、兩足重ネレ繭ヲ(肉刺ができる)、不レ能ハレ履ムコトレ地ヲ、委頓(疲れ切った貌)シテ善ク睡ルコト如シ二重病ノ一。但シ以テ二其ノ食ラフ一レ麦ヲ過グルレ人ニ也為スレ無シトレ慮リ(心配)耳。豈ニ非ズ二以テ一不ルヲレ飲マレ酒ヲ故ニ一乎。強フレバレ之ヲ則チ掉ルレ頭ヲ耳。満坐笑フレ之ヲ。(湘中)

麺酒モテ慰勞ス。山生不ンバレ扶ケラレレ床ニ不レ能ハレ起ツ。而レドモ豪啖自若タリ。為スレ可シトレ笑フ矣。(遊湘)

啖フ二喬麺ヲ一。予與二東壁(東野)・徳夫(春台)一争フレ強フルヲ。主人強ヒテ食ハシム。二子猶ホ謂ヒレ避クト二予ニ三舎ヲ一、大ヒニ噱ヒテ不レ已マ。是日予甚ダ痛メリ矣。不レ能ハ二起立スルコト一、猶ホ扶ケラレテ能ク行ク。二子戯レテ曰ク、「子ハ是レ廉將軍之善ク飯フ耳。尚ホ無カラン二能ク遺矢(原文「失」―注)スルコト一乎哉。」ト。(行記)

崑崙には「三癖」があるという語が後で出てくるが、徂徠のいう「好古の癖」の他には春台『湘中紀行』に「古墓癖」「坐癖」の語が見えるばかりである。「古墓癖」は東野の言葉の引用で「好古癖」と同じものであり、「坐癖」は春台が命名したものだ。しかし、「讀書自若。」に「豪啖自若。」を重ねれば、二つめは恐らく健啖家であること指すに違いない。「豪啖癖」ということになる。しかし、なお一つ誤解をおそれずに挙げれば、次のエピソードにも片鱗をのぞかせるように、人見知りをせずに率直で思い切った発言をする直言居士であったらしいことが三者の日記の端々から窺えるのである。その直情径行ぶりは、先輩たちから温かくかつ辛辣な筆で描写されている。

隠居の根本老人(伯修の祖父か。)が挨拶に現れたときのことである。春台たちが明日の旅程を相談していた。崑崙はぐったりと横になり、聞いているようでもない。疲れて睡っているのだと思って

いた。しばらくすると根本老人が挨拶に来られた。七十歳ほどと見受けられたがひげも髪も黒々として、しっかりした老人である。老人は自分たちに向かって言った。「お前様方もせっかく当家に来られたからには、伯修と一日も酒を酌み交わさずにそそくさとお出かけになるようなことはないでしょうな。」元気のよい老人の言葉にたじろぎ、二人とも絶句してしまったとき、崑崙がにわかに意気込んで挨拶した。「まことにご老人のおっしゃるとおり。（お言葉に甘えましょう。）」二人とも初めて崑崙が睡っていなかったことに気づいたのである。

燈下議スニ明日ノ路ノ所ヲ一レ繇ル。山生臥シテ而不レ聽カ。余二人以テ爲スニ憊シテ而睡レリ一也。須臾ニシテ根太翁出デテ見ユ。年可リ二七十一、鬚髪豐腴、矍鑠タル者也。謂ヒテ二吾ガ輩ニ一曰ク、諸公不ンバレ來ラ已ム。已ニ來ル。不シテ下飲ムニ二伯修ガ酒ヲ一一日ナラ上輒チ去ル耶ト。余兩人舌縮ミテ不レ能ハレ答フルコト。山生忽チ奮ヒテ曰ク、翁ノ之言是ナリ矣ト。始メテ知ルニ山生ガダルヲ一レ睡ラ也。（遊湘）

根翁は伯修に似て豪宕な気性の人だったようだ。ただし、面白く脚色し過ぎている嫌いもある。春台の記録は東野の文飾を欠く分、より細かな経緯を留めている。『行記』も「詰朝」（翌朝）のこととしており、恐らくこちらが正しい。

廿四日（翌日）、故ヨリ二レ行カント。根翁留メテレ之ヲ曰ク、諸君胡ゾ爲スニ乎行色ヲ（出かける様子）一。其レ懼ル、レ雨ヲ歟。鄉也霖雨浹旬（十日）、既ニ有リ二虹ノ截ルコト一レ雨ヲ。法當ニ得ン二十日之晴ヲ一。第ダ優游スルニ以テセヨ二永キ日ヲ一哉。則チ山君モ亦以テ息メレ足ヲ焉ト。余與ニ藤生一ダレ有ラ二以テ答フルコト一。山生奮然トシテ曰ク、不ル二敢テ請ハ一耳ト。於テレ是ニ乎留マル。（湘中）

翌朝、予定通り出掛けようとすると、根本老人が引き留めた。「皆さんはもうお出かけになるのか。雨が心配なのか。もう十日も長雨が降った後で虹も出ましたからは、十日は晴れるというもの。もうひと晩逗留してこの辺を見物して行かれよ。そうすれば崑崙君も足を休ませることができましょう。」という挨拶に、春台・東野がしばらく返事をためらっている折、崑崙が元気よく「こちらこそそう願いたいと思っていたところです。」と応じたので、もう一日滞留することになった。「主人懇ロニ留ム。駕シテレ言ニ出遊ス。」（行記）待ってましたとばかりに先輩を差し措いて応対しているところが面白い。年長の友人たちは呆気にとられたことだろう。

昨日通り過ぎた政子の像を拝し、弘明寺の観音（大悲閣）に詣でたが、千社札の多さに辟易し、堂の後ろ松樹が影を落とす眺望のよいところに座を移すと敷物を藉き、春台と東野は笛で折楊柳など奏でて帰った。丘を降り、再び根本家の前を過ぎて半キロほど行くと井土谷村の乗蓮寺で平太夫人（崑崙は「平禪尼」という。池禅尼か。）の石像を見た。春台は古物だと思った。ここで細かい描写をしているのが崑崙である。像は黒衣青帽、いかにも柔和な表情は禅尼の人柄を偲ばせるに十分なものがあった。

緇衣青帽、與々如タリ（和らく貌）也。慨ニ想ス其ノ爲リヲ一レ人ト哉。（行記）

弘明寺村に戻る途中、牛門の千鞍生（未詳）と相識だと言って昨夜話をした医師宜泉が僕奴に瓦餅（土瓶。徳利か）などを入れた莞席（藺で編んだむしろ。莫蓙か）を持たせて現れ、酒になった。春台らは酒の勢いを得てまた笛に興じた。宜泉はやがて袂から菊と梅の花を出して皆の酒に浮かべた。菊は節物だが梅はどうしたのかと問うと大風の後などに季節外れの梅の咲くことがあるという。以前、韓使（朝鮮通信使）来朝の節、縣次公（山縣周南）が応対した際、韓人は杯に梅花を浮かべて飲んだことがある。そこで「梅・開・杯」の字を韻として詩の応酬をしたことを東野が思い出して話題にした。春台は「唐帝の羯鼓といえども乃公の笛には及ぶまいとますます意気軒昂でいつかな止める気配がない。東野が崑崙のほうを見ると、退屈極まるという顔をしている。

顧ルニ二山生ヲ一、有リ二無聊ノ之色一。余哦ス二一詩ヲ一。兩生和スレ之ニ。而シテ山生益ヽ有リ二怏怏ノ之色一。俄カニ山生下瞰ス。吟哦ノ之聲頗ル高シ。視ルニ二其ノ鼻間ヲ一栩栩然タリ（嬉しそうな貌）。乃チ見ル三根翁ノ之奴、來タリテ將フフ二行厨（弁当）ヲ一也。尋イデ根翁モ亦至ル。奴去ツテ二林中ニ一、拾ヒ二墜葉ヲ一、然シテレ之ヲ煖ムレ酒ヲ。啖飲シテ歡甚シ。（遊湘）

東野は周南詠詩の韻を用いてさっそく得意の詩を作り、春台と崑崙も和詩を詠んだ（「行記」では春台が和したとあるのみ）。崑崙は依然としていかにもつまらなそうな様子であった。そしてふと下を見降ろすと詠詩の声はひときわ高くなった。鼻のあたりをおごめかし何だか嬉しそうな顔つきなのを見て東野も見下ろすと、根本老人が下僕に弁当を持たせてやって来るではないか。「亭午（正午）、主人齎シ二摶黍（原文「摶黍」。黍団子）ヲ一來リ食ハシム。採リレ薪ヲ煎ルレ茶ヲ。則チ山野草莽之實際也。」（行記）詩的潤色によって薪は隠れて落葉となり、「林間ニ煖メレ酒ヲ焼ク二紅葉ヲ一。」（白居易「寄下題ス送リ二王十八帰ルヲ一レ山一「仙遊寺」上」）という『和漢朗詠集』の風流となる次第だが、東野は年少の友の食いしん坊ぶ

りをユーモラスに描いている。春台が概してマイペースであるのと一対をなし、東野は後輩に対する嘲謔を飽くことなく繰り返しながらも、とにかくよく観察して記録をとってくれたおかげで、三幅対の欠かせぬ一端としての崑崙のプロフィールが世に残ったわけである。

そうこうするうちに日脚も傾いてきたので伯修の家に戻ろうとすると、東南の山際にひときわ目立つ二本の松が見えた。宜泉に尋ねるとここから一里（中国里程）ばかりのところにある老松で、一根三幹、蟠龍のごとき奇観を呈しているとのこと。村人はその名も伝えていなかった。崑崙はぜひ見たいと言い出した。「山生前ミテ曰ク、請フ往キテ觀ンレ之ヲ。可ナル乎ト。」（湘中）「太宰欲レ往カント。則チ顧ルニ山生ヲ。生故態發ス。亦欲ストレ往カント。」（遊湘）この「故態發す。」とは持ち前を発揮したという意味か。崑崙自身のいうところは次のとおりである。

晡時、徹シテ席ヲニ歸ラントレ。直チニ其ノ前山ニ有リ二松樹一。陰翳可シレ愛ス。村人不レ記サ二何ノ名ナルカヲ一。惟ダ想ハシム下其ノ瀟洒ナル與二人境一相遠キヲ上也。欲シ三逍二遙セント乎此ニ一、與二二子曁ビ伯脩・宜泉一登レリ焉。行クコト且ニ三里、果シテ一佳境也。予益疲レ極マリ、解キレ劒ヲ轉輾久シウスレ之ヲ。不レ知ラニ日ノ入ルヲ一。始メテ歸ルレ家ニ。（行記）

宜泉を案内として、春台・東野・崑崙に伯修を加え、田畑を隔てて向かいの山坂を一行は登り始める。この辺りの雰囲気は東野の描写がよく伝えている。

山皆樸樕（自然のままの小木・灌木類）、榛莽（雑木や雑草の生い茂っている藪）鈎クレ衣ヲ。無シ二復タ正路一。擇ンデ二樹間ノ可キヲ一レ躡ムレ之ヲ。一ハ左ニ一ハ右ニ、繞ツテ二山腹ヲ一而上ル。宜泉捷甚（とても足が速い）、不レ可カラレ接スレ踵ヲ。（後についていくことができない。）三生ナル者分ツテ為ス二三處ト一。盖シ路窮マツテ而返ル者數ナレバナリ。先ナル者在リ二頭上ニ一、如シ二一跳シテ可キガ一レ及ブ。而レドモ邪ニ追ヘバレ之ヲ、則チ違フ二數十百歩ヲ一故也。余三人後先シテ至レバレ巔ニ、則チ宜泉踞シテレ樹ニ、下窺スル者多時ナリ矣。（遊湘）

苦労して登った甲斐あって、山頂から四望すれば、田畑の畝は井然と碁盤の目に並び、山々が畳なわって近くは翠緑遠くは蒼茫、遥かに箱根の山並から芙蓉（富士山）の冠雪を望む。折からの夕陽を受けてその白さはさらに輝くほどだった。東北に目を遣れば、海の浪もまた光を受けて限り無く広がり、黒い影を波間に現わしては没する帆影がなければ空と見まがうばかりである。本目（本牧）の州の尽きる辺りには懸崖数十丈、半里ほどの幅に延びて、今削りなしたかのように白堊も及ばない壁面を見せている。東野は感嘆の余り宜泉に感謝して、あなたが案内してくれなかったら、ここに名勝のあることを見逃していたことだろう。惜しむらくは、先ほど持参してくれたもの（酒）が今ここに無いことだ。すると崑崙が笑って言った。「初め衛夫人に学んだのが、無駄に時を費した、ってやつですか。」東晋の書聖王羲之は子どもの頃、衛夫人に書を学んでそれを秘法として珍重したが、後に古代の碑文を見、手本を誤ったことを後悔したという。東野はこの崑崙の機智を自分の注力した叙景文の締め括りに使おうと考えた。

余揖シテ二宜泉ヲ一謝ス。非ズンバレ公ニ、幾ンド乎失セン二此ノ山ヲ一也。惟ダ恨ム二向ノ所レ携フルヲ不一レ於レ此ニ也。（返り点ママ）山生笑ツテ曰ク、其ノ學ブ二衛夫人ヲ一、空シク費ス二歳月ヲ一耳。（遊湘）

一行が帰宅すると、今度は根本老人が手づからの酒肴でもてなした。「烹魚煖酒、濁醪尤モ可シレ口ニス。痛飲竟夕ス。」（湘中）一晩中飲み明かして、春台は一絶を賦し、主人に寄謝した。東野と崑崙も和詩を作った。極度に疲労して「轉輾」（寝返りを打つ様）していたはずの崑崙の足は夜になると持ち直したらしかった。「是日山生ノ足、治ムルニレ之ヲ旋ヤ瘳ユ。歩履罔シレ艱。狂態時ニ發ス。所ニ以相與ニ遊陟シ盡クス（クセバ）一レ樂シミヲ也。」（湘中）「狂態」とは何だろう。やはり足の痛みを訴えたのだったろうか。

鎌倉街道

明けて二十五日、日の出とともに一行は朝霧の中を出発した。うまかった濁酒を出がけにまた数杯重ね、江戸に帰る伯修と別れて、両側に小山を抱えた田圃の中の小道を西南に進んで行く。山間の道に入り、依然として霧の中を進むと、昼近く漸く視界が開け、十歩ほど先を歩いていた春台が草の上に座り、右手を見て大きな声を出した。東野と崑崙が追いついて同じ方を見ると眼の前に海が広がり、再び箱根と富士が手に取るばかり近くに見える。この辺りが擲筆松だと春台は言った。少し上り下りして松樹が見えた。弘明寺から二五里の所にあるこの松は、相伝では平安の昔、画工巨勢金岡が当地の景勝を模写しようとして鳴らず、絵筆を投げ捨てたからという。左手に数十段の石段を登ると松の前に擲筆山と門に書き記した草堂があり、能見

堂というこれも心越の筆になる扁額を打ってあった。明僧心越の篆字であり、書法は観るべきものがあるが、「筆捨て」という俗語をそのまま文字にしたのが惜しいと春台はいう。能見とは絶倒の意で、画工が筆を投げてのけぞったところから得た名であるというが、ますます雅でなくなった。中には大きな閻魔の像があるばかりで、他には十人と座る余地がない。「世之縮流（曲）、卑陋ニシテ無キニ雅致一乃爾。」（湘中）蘚を剥がして井上翁の碑を読んだ。細井広沢の書で折目正しい楷書で書かれている。「堂左一一屠蘇鬻グ二心越師ノ八景詩ヲ一。」（遊湘）山上からは金沢の諸名所が絵のごとく望見される。僧侶が出て来て金沢八景の有り場所を一々指さして案内してくれるのをへえへえと「磬折」して（腰をかがめて）聞いた。金沢とは、元来海曲（入江）の名である。入江の東は海に開けて夏島・野島・帽子島など大小の島が点在し、西に迫門神祠（瀬戸神社）、北に称名寺、南に大寧寺（太寧寺）がある。迫門には橋が架かり、前に突出した州の先端には州崎の天女祠（琵琶嶋神社）がある。住民は半農半漁、また「鰆戸」（瀬戸か）があり、潮の干満によって景色を異にする。海東には房総の山々が翠黛を連ね、靄のかかった波間に帆影が縹渺と見え隠れして何とも美しい。いつの間にか腰を据えて見入ってしまったが、それでも当地の絶景の十が一をも尽くすことはできない。巨勢氏が筆を投げたのも宜なるかな。東野は松樹に倚って八景の詩を読んだが、僧のくどい解説のために詩興もだいぶ減殺されてしまった。春台と例のごとく笛を吹く。崑崙もさすがにこの景に見惚れたのか、例の調子ではあるが同座していた。

於テレ是ニ余與ニ藤生一踞ッテ二松根ニ一吹クレ笛ヲ。山生存スレ焉ニ。（湘中）

例によって皆が大騒ぎしながら饒舌っていると、供人を大勢連れた貴婦人がやって来た。簦（傘）と屩（草履）履きの三人ずれを見て珍しがり、付き人に茶菓を持たせてふるまってくれた。崑崙は「投ゲレ菓ヲ歸ルレ荑（つばな）ヲ。」（行記）と、『詩経』の句を使って美人の贈り物に挨拶する意の記録を残した。春台は記念に戯詩を詠み、東野が和した。東野の作には「二毛却ッテ笑フ潘中郎。」の句があった。東晋の潘岳はその美貌のために婦人たちが車に果物を投げ入れた（『世説新語』）。その潘岳がまだ中年にして白髪に驚いたという「潘鬢成霜」の故事を逆手にとり、まだ若いのに老人扱いされたという自虐の心である。三人はさらに大笑いして下山した。

一里ほどで称名寺に着いた。平実時（北条実時）が僧審海を招いて創建した寺で、子の顕時の時に書を蔵し学徒を招いた。今では廃れて往時の俤はない。山門の金剛力士像と本殿の弥勒菩薩像は運慶の作である。庭内には藤原為相（冷泉為相）が歌を詠んだという六浦機樹の樹や、西湖から舶載されたという黒梅の樹があったが、いずれも元の木は枯れていた。庭のたたずまいにはさすがに古色がある。ちょうど本殿には数人の僧が列座し、寺の重器を見ているようだった。主人が自分たちに気づき、横で見られるようにはからってくれた。大概は仏像・経巻・衣鉢の類である。その他には朝廷からの文書が多かった。中国の珠簾などもあった。どれも貴重なものには違いないが、自分たちからすれば所蔵されている古書が最も貴重である。後ろの山に文庫があり、廃れて久しいがまだ古書の若干は存している。現在は手前の土蔵を文庫と称しているという。しかし、古書は見せてもらえなかった。暗い部屋の奥で、虫鼠の餌食となるのがいかにも残念だ。

寺を出て南に行き、浜に出ると漁村があり、浜は細かく屈曲して外海への出口の狭い所に橋が架けてある。橋の西には迫門祠がある。華表の南の小島には天女祠があり、やはり橋を通っていくのである。どれもさしたる眺めではないが、上に生い茂る松柏の有様は見応えがある。金沢の景勝とはこの辺りの眺めをいうのであろうと思い、春台はまた笛を吹いたが酒がない。酒がないなら旅をしないに越したことがないとぼやくと、崑崙が笑っていう。「何を見当違いな。薄遊だからこそ我々にもできるので、壮遊だったら元来ができません。どんなものでも願ったりかなったりなんてものはないのが天の道です。まったく分かっていないんだから。だいたい、春台さんたちは私が酒を飲めないために再三私を肴にするから、こうも言って突っかかりたくなるんですよ。」春台は聞き捨てにして歩いていった。

歎ジテ曰ク、悲シイ哉、薄遊之無キニ以テ爲ス一樂ミヲ也。遊ンデ二勝地ニ一而モ不レバ飲マ、ホキニ之レ不ルガ一レ遊バ也ト。山生笑ッテ曰ク、子ノ言謬レリ哉。吾輩ハ惟ダ能ク薄遊スルノミ。故ニ得レ遊ブヲ。若シ必ズ壯遊セン邪。則チ不レ可カラレ得耳。物ノ無キハレ兼ヌルモノレ美ヲ、天之道也。子ノ言謬レリ哉。之レ子屢以テレ不ルヲレ飲マ見レ嬲ラ。故ニ爭口迺爾ト。（湘中）

迫門の西南に引越という村があり、住民は製塩を生業としている。井桁の形の塩場を過ぎて左に金龍院という禅寺がある。後ろの浜に奇石が樹木によりかかるようにしてあり、幅一丈（約三メートル）で頭が大きく、高さはさらにある。昔、大山積霊（大山祇神）が豆州三島から飛来してこの石の上に止まったので、里人が祀ったのだという。迫門祠がそれである。道は平坦になり、西に折れて六浦里を通る。金沢から十里ほど行った辺りの山裾に厳嶋地蔵菩薩像がある。ここが武州・相州の境界で、界地蔵という名がある。また鼻が欠けているので劓地蔵（鼻欠地蔵）ともいう。さきごろ山崎闇斎先生という人があり、その愛宕詩の中に劓天狗・黥地蔵という言葉があった。そうしてみるとこれも山崎門下のしわざであろうか。黥ですら酷いが、劓とはなおすさまじいことだ。

さて相模国に入り、二里ほどの所に山を削り洞門となした所があり、土地では朝比奈洞門（朝比奈切通し）と呼ぶ（「遊湘」には朝夷鑿とあり）。切り立った断崖が十仞（十尋）ほど、道も険しい。仁治年間、将軍頼経が平泰時（北条泰時）に開かせたものと伝えている。和田義盛の子朝比奈義秀が一夜にして掘鑿したというのはおかしい。道端に梶原景時が刀を洗ったという泉があるが、由来は未詳である。切通しの東数里に嘗鹽地蔵を祀ってあるが、六浦の人が鎌倉に塩を売りに行くとき、この像に塩を供えたという。別説では、もとこの像は光を放っていたが、ある塩の行商がこれを地に倒して塩を食わせたところ怪がおさまったので名づけたのだともいうが、斉東野人（田舎者）の俗説で笑うべきものだ。さらに一里ばかり先に明王院がある。五大明王を祀り、五大尊堂ともいう。寛永年間の火事で四大尊は焼け、不動明王だけが現存している。その東の草深い所は源基氏（足利基氏）の邸跡である。鎌倉の盛時に足利氏は累世ここに拠っていた。尊氏が天下を取ったときは、長子の義詮がここにおり、義詮が将軍になると次子の基氏を関東の鎮守（鎌倉公方）としてここに住まわせた。その後、持氏の代に至って職を失い、駿州に出奔する。少子成氏は土岐持益に養われて信州にあり、やがて越後の上杉房定の嘆願で鎌倉公方となった成氏が旧宅を修理してここに住んだ。成氏が古河に移った後、遂に廃墟となる。しかし、それ以後も鎌倉の住民はまた戻ってくるかもしれぬというのでそのままに放置し、こうして荒れ野となったのだ。

鎌倉　一一日め

土地の老人の話ではこの野原を過ぎると、右手に浄妙寺があるという。この寺は尊氏の父貞氏が創建し、関東五山の第二となった。今は衰退しているが、実に瀟洒な禅刹である。寺の前を西に流れる川が青砥藤綱が銭を落として拾わせた滑川だ。やや進むとまた右手に杉本寺がある。地名から大倉観音堂と東鑑（吾妻鏡）に記す観音で、坂東三十三観音の初めに当たる。門を入って石の階段を数十段上ると中腹に観音堂がある。境内は掃除が行き届き、他の野寺のようではない。古木あり巌あり、これまた浄刹である。地蔵菩薩の石像があり、脇の下から腰にかけて斜に深い刀創のようなものがある。春台は「これも山崎一門のしわざだろうか。さっきは鼻を恐るべきものと言ったが、腰斬とはそれどころではないな。まったく、当節はお地蔵様も御難なことだ。」二人とも笑っていた。

さらに行くとこれも右手に石段が百段ほども続き、荏葉祠（荏柄天神社。「遊湘」では荏梗天神祠）がある。頼朝の頃にはすでにあったという古祠だ。ここで護良親王の墓の在処を問うた。神社の東に方二里余りの田が頼朝の邸跡である。変わり果てた有様は黍離の歌を賦すにふさわしい。北に頼朝が念佛・誦経していたという法華堂がある。初めは銀の二寸ばかりの観音像を安置したが、後木像を造った際、その頭の中に銀の像を納めたのが現在雪ノ下の相承院にあるという。それは阿弥陀の像であろう。堂の後ろのうねうねとした石磴（石段）に沿って下りていくと頼朝の墓があった。古い石塔で一字の銘もなく、苔蘚むして囲いもなく、人主の墓のようでない。所伝が疑われるほどだ。崑崙は感銘を受けて言った。「生きている間、民に哀れみを施さなかった者を、いったい民が哀れむものでしょうか。」二子ともに頷いた。

> 謁スニ頼朝墓ニ。於テレ是ニ與予遽カニ有リレ感。謂ヒテニ二子ニ曰ク、墳墓之間、ダレ施サニ哀ヲ於民ニ。而シテ民哀レム者ヤ、否ヤ乎ト。（行記）

東野はまたこの時の崑崙の印象を次のようにまとめている。

> 而山生ハ則チ喜ビ可キレ知ル也。蓋シ生居ロ有リニ三癖一。而シテ古墓ノ癖最モ入ルニ膏肓ニ。路ニ遇ヘバニ一蒭蕘・一農圃ニ一、必ズ問ヒテ下有ルカニ古墓一否ラザルカト上、而後敢行ス。好ムノレ古ヲ之迂ナル、雖モニ吾ガ曹モ同病ナリト一、而余ト與ニ太宰一、将ニレ避ケントニ三舎ヲ一也。（遊湘）

すぐ西隣が鶴岡である。到着したときは日没時だった。鶴岡の下を雪ノ下里という。八幡宮に詣で、そこの司祝（神主）の家が参拝者を泊めてくれるので、さっそく宿をとり横になった。

しばらく休んで、春台が柱に凭れて笛を吹いていると、主人が聞き咎めて挨拶にやって来て言う。「皆様方はどういう方々で、どちらから来られたのですか。今吹いておいでの笛の音など、こんな人里離れた場所で聞いたことがありません。当地にいらしたご縁でもう一曲お聞かせ願えませんか。」下手だからといって春台が遠慮すると、もう一人老人が現れて挨拶する。「わたくしはこの社の楽人でございますが、田畑に生い育ち、相伝の節回しをすべてと心得、まだ都の正しい音階を耳にしたこともございません。とはいえ代々この社の奏楽で家食してまいった者で、ぜひお聞かせ願いたく存じます。子弟の者どももただいま外に集まり、耳を澄ませております。そしてわたくしにぜひお願いしてほしいと申します。われらごとき者のために、もう一度お聞かせ願うことはかないましょうか。」甚だ恭しい挨拶である。春台は承知してその十名ほどの子弟なる者たちにもっと近くに集まるように言ったが、皆遠慮して進む者がいない。わずかに少年が二人、お辞儀をして末席にかしこまった。そこで春台は東野と一曲を吹いた。東野はまた篳篥も吹

いた。崑崙は歌を歌った。聴く者たちは非常に喜び、ほめそやした。春台は古都鎌倉の遺風を感じた。そして老人は何をお弾きになるかと尋ねると篳篥を吹くという。反対に所望したが固辞して譲らない。東野が少年たちに尋ねると、一人は笛、一人は篳篥を習っているという。少年たちに何度か勧めて数曲を吹いてもらった。少々まちがった所を直してやると、とても感謝して礼に社殿の楽器・重器を見せるから明日朝いらっしゃいという。笛の少年は大石氏、篳篥の少年と老人は鴨氏である。宿の主人松尾氏ももと神職の親族である由。夜もすっかり更けたので皆横になった。崑崙はとつくに華胥の国に遊ぶ夢を貪っていた。

乃チ山生ハ則チ爲シテ二華胥ノ之遊ヲ一已ニ久シ矣。（遊湘）

崑崙の記述では、「夜深ク太ダ冷エタリ。主人綈袍戀々、有リ二故人之意一。即チ寐ネタリ。」（行記）とあり、紬の綿入れを貸してもらい、暖かく睡ったようである。これは『史記』范雎列伝からとっている。

鎌倉　一二日め

二七日は牛門で楽を肄う（稽古する）約束をしていた。一日も無駄にしないという約をしたのもそのためだったのだが、結局間に合わない。三人で相談した。行きは東海道の南側を中心に見ようと計画していた。護良親王の土牢や偏界一覧亭の趾などもあるが、できるだけ早く出立して鶴岡と西の画島（江ノ島）を見、金河（神奈川）の宿に戻れば間に合うのではないか、と。

一夜明けて二六日の早朝、まだ暗いうちに朝飯を済ませ、再び鶴岡八幡宮に詣でた。大猷院（徳川家光）の時、一度大修理をしたが、それでももとの規模には及ばないと地元の人々は言った。鶴岡八幡宮はもと応神帝の廟である。治承に頼朝がここに八幡宮を祀ったのがはじまりである。華表は南に面し、中に放魚の池を掘ってある。中に小島が七つあり、その一つに小さな祠を建て、運慶の刻んだ天女像を安置しているが、相伝では平重盛の家にあったものという。天女の抱えている琵琶は重盛が弾いたものと伝えている古物らしいものである。玦の字をなして左右から大池がめぐり、その合するところに赤橋という石橋が架けてあり、虹のような穹窿をなしている。昔は木を磨いて丹塗りにしたものだったのだろう。現在の石橋は特に赤い色でもない。石橋から一区画進んだところに、左右に木の柱を立て、横木を渡してある。人が通れるほどの高さである。これは馬を駐めるためのものだ。鎌倉の寺院や神社には、官寺・官社にはどれもこれがあり、現時の下馬札に比べれば俗な感じはしない。真っ直ぐ北が山門で、阿吽の金剛力士二像を納める。扁額には「鶴岡山」とある。曼殊院法親王良恕の書である。山門の東に多寶塔、さらに鐘楼がある。山門の中は舞殿となっていて、その東を少宮という。少というのは、仁徳帝を祀ったところからの呼称である。もともと源頼義が建てたものが由比の地にあったのを頼朝の時に現在の場所に規模を拡張して移したものだ。応神帝の廟を建てたのも頼朝である。舞殿の北は石階で西に十抱えもある銀杏の樹がある。丈は十仞に近い。言い伝えでは僧公暁が実朝をこの樹の下で殺したというが、真偽のほどは分からない。階上の平坦になったところに楼門があり、八幡宮寺の額がかかる。これも良恕の書だ。左右は回廊が連なり、門内はすぐに八幡祠となる。祠堂の後ろの山を鎌倉山という。俗説によると、昔大臣藤原鎌子（藤原鎌足）が所持していた鎌をここに埋めたという。そこで大臣山ともいうのだとか。この山の名から郡一体も鎌倉と呼ぶことになったらしい。祠の後ろは回廊がぐるりと巡っていて、その外はもう山裾である。西廊の外には頼朝の廟を建てて木像を安置してあり、白旗廟と号する。その西石階の下には実朝の廟を建て、柳営祠と呼ぶ。境内には他に仏殿・経蔵があり、小さな祠堂に至っては枚挙に遑がない。

この日、昨日金沢で会った貴婦人が鶴岡に詣で、老少の巫八人による巫舞を奉献した。年寄った者は緑衫朱袴、幼い者は白衫の姿である。手に金鈴を持ち、容儀正しく鼓の音に合わせて一前一却するだけである。三人は舞殿の下に立ってこれを見た。これはわが東方の巫祝（神職）が鬼神（八百万の神々）を饗するものであり、もとより雅楽ではない。（この辺りは華夷思想を自らに反映して「東夷」と自称した徂徠に学んだ儒生の表現である。）しかし声容の美は都鄙尋常の巫祝の淫靡をなすものと同日のものではなく、古の遺風を残している。楼門に登って下を見下ろすと、一路髪の如く真っ直に由比濱（由比ケ浜）まで延びている。海が遠く耀いている。浙江の楼もこんな感じだろうか。しばらくして楽人の大石少年が現れ、我々のために宝庫から楽器を出して見せてくれた。中に仮面（伎楽面）が数枚あったが、どれも精緻な有様はめったに見られないものだ。その他はそれほどのものもなかった。やがて西の階段を降ると南向きの大門があり、門内は左右に十二の僧院があった。ここに八幡宮の執事の僧がいる。雪ノ下の里に行くと自分の識っている隆真師の住する等覚院があったのでこれを訪ね、少し話をして別れた。宿舎に戻った時は日がもう高く上っていた（三竿を過ぐ）。すぐに朝食をとって出かけた。

雪ノ下から西北に巨福路（小袋阪（「行記」））を行く。道の左に円応寺があり、運慶が地獄に落ちて閻羅王を見、蘇生して造ったという閻魔の木像を安置している。世の愚人は見たこともない閻魔を畏れ崇拝しているのだ。この像はふだん厨子に入れて鎖してあり拝むことができない。

これは銭を取って像を見せようというのだ。三人とも見たくもないから長揖して出た。坂を下って建長寺を訪ねる。寺は道の右方にある。建長年間、平時頼（北条時頼）が宋僧蘭渓道隆のために建てたものだ。これも関東五山の一つである。外門が二つあり、東のものは南に向き、海東法窟の扁額を懸け、西のものは西に向いて天下禅林とある。どちらも朝鮮の人竹西の書である。東野は麗奴の署するもので、墨猪（肉太なだけの字）にして観るべきものはない、と言った。東門を入ってしばらくすると西に大門を建て、巨福山と署してある。趙子昂（諡文敏公）の書というが遽かに信じ難い。元僧一山（一山一寧）の書とも、趙子昂の書とも伝える。大門の北に楼門があり、建長興国禅寺とこれは宋僧子曇の書である。余りに大きな扁額なので楼の下に懸けてある。門は元来もっと大きなものだったのだろう。規模の違いは他のものも同様であろう。仏殿があり、丈六の地蔵菩薩の立像がある。仏殿の西北は方丈で、時頼の木像がある。方丈の前の小さな池には石製の螭を置いてあり、その口から出る水を金龍水というそうだ。その東の西来庵は大覚禅師の祠堂である。寺は衰えたが、鬱蒼とした木々は懐古の念を起こさせるたたずまいだ。

法窟門を出ると杉谷天女祠（杉ヶ谷弁財天。現存せず。）がある。巌を削り、門を造ってある。祠の後ろに石洞があり、澄んだ水が溜っている中に石像が置いてある。洞窟を出て、新井閻羅（新居閻魔堂・円応寺）を尋ね、西北に進むと、道の左に長寿寺がある。これは源基氏（足利基氏）が父尊氏の廟として建てたものだ。すでに衰微して見るべきものもない。春台と東野は寺を振り返っただけで歩み過ぎたが、崑崙だけは中に入って調べていた。

余与二藤生一顧視シテ而過グ。山生獨リ探ル之ヲ。（湘中）

建長寺の西北に畑が数頃（数百畝。一畝は百歩四方、約一・八アール）ある。これは上杉憲顕（初代関東管領）の邸跡で、子孫が上毛の平井に移るまでここに住んでいた。その西北が明月院で上杉憲方の創建である。門を入って左折すると禅興寺がある。もと最明寺といった。これも時頼の創めたものだ。今は廃寺になって仏殿だけが遺っている。ざっと調べてそのまま寺を後にした。今度は左手に浄智寺があり、明月院と正対している。この寺は平師時（北条師時）が建てた禅刹で、やはり五山の一つである。今はすっかり衰えた。浄智寺の西北を松岡と呼び、東慶尼寺がある。平時宗（北条時宗）の妻で貞時の母となった藤氏が尼となり覚山と号した。それがここに寺を造って住したが、後ここで貴家の女が多く得度した。そうして尼僧の叢林となったのだ。重門を建て、出入に誰何する。第二の門に札を立て「禁男子入寺」とある。男子の入るを禁ずる寺法である。世間の女子で尼を志願しながら父兄に許されない者が、一たびこの寺に入れば、父兄といえども離縁せざるを得なかった。地元の人の話では、良人を悪みながら去ることのできない婦人や、浮気をしてその発覚を懼れたり、もとから再嫁を欲する者たちが断髪してこの寺に入った。別居して二年を過ごし、再び髪を蓄えて世間に戻り、改めて他処に再嫁するのだという。お上にも明文化された法規はなく、前夫もこれをどうすることもできない。淫婦の叢林とも言われるゆえんである。

ここを出るともう円覚寺が右手にあり、東慶寺と向かい合っている。これは弘安年間に平時宗が宋僧子元のために創建したものだ。これまた五山の一刹である。外門は廃れている。大門には瑞鹿山とあり、「天皇彌仁」（後光厳天皇）の書である。大門の東の小門を外門にしている。山門もまた廃れている。春台はまず帰源庵のありかを寺僧に尋ねた。小門を入ってしばらく進んだ東方、もと識っていた岱西堂の許に立ち寄り、本寺の故事を尋ねた。師は茶菓で一行を供応してくれ、雛僧の良蔵主という人に案内させてくれた。帰源庵の北の山上に鐘楼があり、大きな鐘を懸けてある。鎌倉の諸名刹の中でも、この鐘ほど大きなものはない。厚さ一尺ほどもあり、子曇の銘の後ろに正安年間に鋳造したものであることを記してある。鐘を敲くと、非常に清澄な音が響き渡った。僧の話では鐘を掛けた鉄製の環は刀鍛冶正宗が鋳たものであるという。鐘楼の西北に方丈があったが、ひどく荒廃していた。さらに西北に一里ばかり進むと山裾に正続院があり、これは本寺の開山である仏光禅師の祠堂である。禅師は宋の人で、平時宗がこれを招いて寺を建立した。祠堂には禅師の木像を安置している。厨子を開いて拝むと、儼然として華僧の容儀をしている。極めて精巧な像で、顔はまるで生きているかのようだ。金字の札を立て、慈照とあるのは時宗が手書したものだ。所蔵の円硯は斑模様の石製で、さしわたしが一尺以上もある。これは禅師来日の行李にあったものだ。方丈の西南には仏殿があり、大光明寶殿とあり、これも後光厳天皇の宸筆である。釈迦の木像その他を置いてある。仏殿の横に僧堂があるが、他は一体に荒廃している。この辺の山は低くて建長寺に及ばない。荒廃の度もさらに進んでいるが、遺跡を回ってみると往時の宏麗さが偲ばれる。関東の仏寺の中で、建長寺に比肩するものはこの寺だけだと謂ってもよかろう。だからここを訪れる者は必ず奥まで参り、そしてもとの道に戻るのだ。

長寿寺の横を南に折れ、亀谷坡を渡って扇谷を下ったところで道を歩く一老僧に出会った。崑崙はこの僧にこの辺りの名所で見るべきところがあるかと尋ねた。僧はこの辺りはどこも名所ばかりだよと答えた。崑崙はなんだという顔して、そのうち華語で僧の悪口を言った。僧は何を言われているのか分からなかった。三人は手を叩いて笑った。

山生問フラク、此ノ地ニモ亦有リヤ二名區ノ可キレ探ル者一否ヤト。僧曰ク、四境之内、無シト三處トシテ不ルレ二名區ナラ一。生憮然タリ。少焉クシテ爲シテ二華語ヲ一以テ罵ルレ之ヲ。僧聞ケドモ而不レ喩ラ。我三人抵チテレ掌ヲ而笑フ。（湘中）

西に進むと妝坡（化粧坂）の坂下に出る。景清が囚われたという地牢（土牢）が左下の山裾にあった。圯（土橋）が崩れ落ちて、確かにこれとも見分けられない。切通しの北を梅谷という。ここから戻って泉谷に行き、花光寺（未詳）を過ぎ、浄光明寺が左方にある。これは建長年間、平長時の創建だが、もう荒廃していて仏殿だけが存している。仏殿には弥陀の木像を据えてある。裏山の上に為相の墓があるという。東野は疲れて登る気力がなかった。春台は時間がかかって進まないぞと言った。そこで尋ねるのは止めにした。

山生欲スレ探ラントレ之ヲ。余恐ルレ二移シテレ晷ヲ尼メンコトヲ一レ之ヲ。乃チ止ム。（湘中）

戻って亀谷に行き、英勝尼寺（英勝寺）を通る。これは大田持資（太田道灌）の邸の跡だ。持資の玄孫が尼となって名を清春といい、家を尼寺となしたものだ。そして水戸の威公（徳川頼房）の女を得度させ、五峯と名づけたこの尼に寺を与えたので尼寺となった。広々していることは東慶寺の比ではないが、やはり男子の入門を禁じているので立ち寄ることはできなかった。この辺りに「扇の井」があり、扇谷の名の由来となっているが、扇の形になっているというだけのものだ。尼寺の西を源氏山というが、昔は武庫山とか亀谷山といい、亀谷の中央にある。言い伝えでは、源義家が奥州征伐の時にこの山に登って東国の兵を集めて白旗を揚げたので源氏山または旗揚山（遊湘では「建旗山」）というとある。扇谷・梅谷・泉谷はどれも亀谷の別名である。

英勝寺の北隣が寿福寺だ。もと源義朝の邸だった。頼義は奥州征伐の時、子の義朝を家に留めた。義朝はここに住んだ。頼朝の時、岡崎義実が義朝のためにここに寺を創り、その後池禅尼が寺を修復した。僧栄西の像を置いてある。それから五山の最古のものとなった。殿堂は皆廃れ、仏殿ばかりを残している。竹籠釈迦像を安置する。仏殿の西、南山の腰に千光國師の祠堂がある。その後ろの巌穴に石塔があり、実朝の墓と言い伝えているが、恐らく誤りであろう。およそ鎌倉のいわゆる五山は長い間衰替のままに置かれていた。当時の規模を観るべきものは、建長寺・円覚寺を数えるばかりで、寿福寺・浄妙寺・浄智寺に至っては見るかげもない。寺の序列では建長・円覚・寿福・浄智寺・浄妙の順となる。これは義満の命じたものだ。

さて寿福寺を出て南に行く。道の左に畑があり、これは上杉定政の邸趾だ。藤ケ谷を過ぎ雪ノ下に来て、鉄井（鉄の井）の鉄観音を観た。ここを過ぎて東に折れ、また北に曲がり、雪ノ下の宿に戻って昼食をとり、主人に酒を頼んだ。村の酒は醴（甘酒）のようだ。数杯重ねたが酔いに至らない。新酒でまだ熟成が足りないせいだ。すでに昃（昼過ぎ）になり、再び道を鶴岡の東にとった。荏柄天神を過ぎて東北に向かい、田の間を通って山村に入る。雪ノ下から三里余り行くと覚園寺（覚苑寺〔「行記」〕）に至る。これは永仁二年、平貞時が剏めた所だ。薬師仏の木像を安置し、他には地蔵殿がある。そこから南に一里ほど戻ると、山の下にある田んぼは東光寺の趾である。その東の山裾にまた土牢があり、これは源直義（足利直義）が兵部王護良親王を尋殺した所だ。荊棘を分けて見ると、深さ一丈半、広さもそれくらいの巌穴である。入り口はすぼまり、中は広く、二十人くらい座れそうだ。ただし穴の口が崩落しているので、少し中をうかがうとすぐに出た。その東南に理智光寺があり、山の上に親王の墓があるというが、そこへは行かず、ここから東に向かった。二里ほど進み、嶺を渡って瑞泉寺に出た。

瑞泉寺は大きな山寺である。山に入って半里ほど行って、始めて寺門があった。寺そのものはそれほど結構の大きなものではない。貞治年間、基氏が造営したもので、夢窓国師の兎裘（隠棲地）である。殿宇は荒廃し、昔の俤をほとんど残していない。東北の山頂を徧界（一覧亭の墟である。石段はうねうねとして坂は険しい。九十九折を登り切ると、数十人が座れるほどの平坦な場所に至る。今では亭の礎が残るばかりだ。岡が重畳し、下は深い谷に臨む。西南を望見すると、蒼海が天に連なり、遠く富士箱根、近くは湘中の山々が一望のもとにあり、応接に暇がない。実に都の勝景であるが、例のごとく酒がない。未練を残しながら坂を下りると、寺僧に遇った。僧は席を設け、茶を命じ、三人を故旧のごとくねぎらってくれた。春台が亭のいわれを尋ねる。僧の話に、国師が京都の乱を避け、関東にやって来たので、基氏はこの寺を国師のために建立し、錦屏山と号した。楓の樹が多かったからである。国師はここに老年まで住した。そして亭を造ったのである。その後、亭は何度か修復され、近年では水戸の義公（徳川光圀。梅里君〔「行記」〕）が再修し、賜宴があった。ところがまた風のために壊れてしまい、もう三年になる。まだ再造の話がないのが痛ましいことだ、云々。三人も顰みに倣わない者はなかった。僧はまた国師の祠堂に案内してくれ、国師および基氏・氏満の木像を拝むことができた。さて出ようとすると、僧がもっとゆっくりしていらっしゃいとなお引き留める。聞くと、自分は岱西堂と親しい者で、さっきあなた方を帰源庵で見かけた。これも何かのご縁であろうかという。僧の名を尋ねると節首座と答えた。深く感謝して別れた。またもとの道に戻り、頼朝の政庁趾を過ぎて滑川の橋を渡り、宝戒寺に到着した。ここは北条氏の館趾である。北条氏が亡んだ後、尊氏が寺を建て、僧円観を据え、北条氏の霊を

祭らせたのである。寺はもと葛西谷にあり東勝寺と号した。そこは北条氏の墓のある所で、高時が家臣と自決した場所である。尊氏は寺を現在の地に移し、現在の名称に改めたのだ。地蔵尊その他の諸像がある。また徳宗廟というのは高時を祭った祠である。東南の田んぼが葛西谷だ。今は宝戒寺の寺域となっている。

そこから出て南に向かった。道は平坦になり、小街（小町）という。鎌倉の市街である。宝戒寺の南を俗に塔衢と呼ぶのは、道路脇に小さな石塔があるところからだ。一体、鎌倉府の街衢には往々古石塔が見える。所伝では藤原鎌子の玄孫太郎大夫時忠という者に三歳の子供があった。ある日、鷙鳥（鷹や鷲の類）が襲って連れ去った。捜していると道に遺骨があったので収めてこれを葬った。そして石塔を建てたという。これも真偽は不明である。小街を過ぎて東に折れ、蛭子橋を渡り、南に折れると道の左が比企谷といい、比企能員の宅趾である。能員の姑は将軍頼家の妾となり、後に頼経の夫人となった娘を産んだ。そして能員とここに住んだ。能員は北条氏を謀ってかえって殺され、比企氏は遂に亡んだ。その子の三郎は逃げて僧となり、順徳帝に仕えて寵せられ、帝に従って佐渡島に渡った。頼経が将軍となった時、三郎は鎌倉に帰り、故宅を寺となして妙本寺と号した。そして僧日蓮を置いた。この日蓮がその法を弘めたのは、この寺に始まるのである。（三郎と頼経を罵倒する文が続くが、それは儒家の立場からのものとして省略する。）

妙本寺の南を大街という。そこから古康荘、花谷、石井松葉谷を経て、そこを東に折れると田代観音がある。これは田代信綱の遺跡である。今は寺となり、普門寺という。やがて道は海浜に近づき、名越の漁村を通ると切り通しがあり、大小峠峒という。伊豆との国境である。道の左に補陀洛寺がある。これは僧文覚の遺跡である。この時、日はもう暮れ方になっていた。足も痛くなってきたので、門まで来て引き返した。小壺の漁村を南に抜け、浜辺沿いに東行して二百歩と行かないうちに光明寺があった。これは平経時が僧良忠のために建てた寺だ。初めは佐介谷にあったが、後にここに遷った。外門は西に向き、中に山門がある。額には天照山とあり、天皇彦仁（後花園天皇）の筆である。寺は結構がほぼ備わり、正殿を良忠祠堂といい、記主禅師と題額する。春台が尋ねた瑞三師には遇わなかった。碩上人が遺ってくれた師の書を寺僧に渡して、寺中の名物を見せてもらった。案内の僧は殿堂を巡り、記主禅師の木像その他の像を拝観させてくれた。最後に寺の後ろの山に登った頃にはもう黄昏になっていた。海天蒼茫、上下の境も見えず、山を指してもその形すら判然としない。漁火と星明かりが相映じて、真っ暗な中に耀いて見える。もし白昼に登ったなら、この趣は知らなかったことだろう。図らずも名勝を一つ加えた形になった。すっかり暗くなって下山すると、僧が茶を淹れてくれ、もうすっかり暮れてしまったので、ここに泊まるか、または明日またいらっしゃい。そうしたら、本寺の重器もお見せしましょうという。それは辞退して僧の名を尋ねると鑑全だと答えた。親切の礼を言ってもとの道を戻る。大街・小街を過ぎて雪ノ下に帰った。今日は崑崙の健脚ぶりは、春台・東野以上だった。至る所を訪れ、とくに古墓を尋ねた。東野は崑崙には「古墓の癖」があるのだ、という。さて宿に戻ってから一気に疲れが出、足がまた腫れそうになり、急いで薬治（灸治）を頼む騒ぎとなった。春台と東野の足は平気なものだった。春台は崑崙には「坐癖」の病があり、二六時中座っているからこの有様なのだと思った。主人は懇々と鎌倉時代の話をしてくれた。今の物寂しく荒廃した様子を見ると、別世界のことを聞いているようだった。

是日山生之健、過ギ二於我二人ニ一。凡ソ所ノレ経ル名區、莫シレ不ル二推尋・捜索セ一。最モ尋ヌ二古墓ヲ一。藤生以テ爲ス二古墓ノ癖ト一。及ビレ反ルニ二旅次ニ一也、疲レタリ矣。其ノ足ニ二復タ腫起セント一、遽カニ求ム二薬治ヲ一。我二人ハ則チ自如タリ。山生ハ蓋シ坐癖ノ疾ナル爾。（湘中）

長谷、腰越から江ノ島へ

二七日、明るくなるともう出立した。主人は妻と共に現れ、境内の尽きるところまで送ってくれた。その温かい心づかいは終始変わらず、真心を尽くしたもてなしを受けたのは、初めただの旅宿と思っていた自分たちには誠にありがたいことだった。下男下女、奴僕の類まで主人の言いつけに謹んで従う有様は、この地方のならわしであろうか、それとも主人の人柄のせいだろうか。雅楽に感銘したのでもあったろうか。

鶴岡をまっすぐ南に下っておよそ五里の道のりを一気に海辺に出た。両側はこんもりと茂った松並木である。途中、華表が二箇所あるがどれも堂々たる大きさだ。もともとは三つあり、三つめは今でも海中に立っていて、潮が引くとその天辺が見えることもあるという。馬道を西に折れ、畑道を行き、蜑索祠（甘縄神明社）に立ち寄り、稲湍河（稲瀬川）を渡ってさらに西に進み、光則寺に至る。宿屋光則の邸趾である。言い伝えでは、日蓮の弟子日朗が囚われて宿屋氏の土牢に押し籠められ、また日蓮も斬られようとした場所であるという。日蓮が斬を免れたとき、日朗も赦された。それ以後寺として、日朗を住まわせたのだ。当時の土牢が現存しているので見ると土窟（矢倉）である。いったい府中の山にはこれがたくさんあり、どれも岩肌を鑿って造ったものだ。

四角いものやそうでないものもある。恐らく物を納めたり人を閉じ込めたりしたものだろう。その他はたいてい昔墓地として使われていたものがほとんどである。俗に櫓と呼んでいるが、何の意味であるかはわからない。あるいは番兵を置き、外敵を窺わせたものか。土牢があるのも怪しむに足りない。ただし、護良親王を閉じ込めた土牢は、見る者の肝を寒からしめる。尊氏兄弟が敢えて親王を亡き者にしようとしたほど畏れていたことがわかる。

光則寺の前を北に折れ、大仏に詣でた。建長の頃に鋳造した盧遮那仏の銅像だ。趺坐した高さが四丈もあるのがひときわ目立つ。南都(奈良)や平安(京都)のものに比べれば大きさは半分ほどで、しかも東都のものは殿舎がなくなり、露天仏となっている。どれくらい経ったものか分からない。仰ぎ視てから、もとの道に戻って長谷寺を訪ね、観音の木像に参拝した。この木像もまた丈が三丈もあり、異彩を放っている。東面して立っている。大和の長谷に倣って造られたもので、土地にも像の名をつけ長谷と呼んでいるのだ。山を下りて西南に向かい、景政祠(御霊神社、鎌倉権五郎神社)に寄り、星月里(星月井)を経て極楽寺に着いた。これは平重時が剏めたもので今は衰えている。

門を出て南行する。山を鑿って道を造ってある。極楽寺洞門(極楽寺穿道(「行記」))と呼ばれるのがここだ。雪ノ下から六里の所である。ここを過ぎてやがて海に出る。稲叢(稲村)という。源義貞(新田義貞)が鎌倉を攻めた時、海神に祷ったところ、潮が五六里も引いたというのがここだ。ここは鎌倉の廓門(入口)でもある。さらに西に進み、腰越に至るまでを七里浦(七里ケ浜)という。沙が深く膝を没するほどで、璣貝が沙にまじり、煽爛(ぎんらん)といろいろな色が混ざってまるで落花を敷き詰めたようだ。女の子たちが喜んで拾い集めている。他にまた一種細かい粒子の沙があり、真っ黒で炭の粉のようだ。手に取ると鉄粉ほど重く、光を帯びている。これを鉄沙(砂鉄)といい、鉄器を磨くのに適しているので旅人はこちらを集めている。われわれ三人も鉄沙を集め、璣貝を拾って、行李に一杯入れ、時の経つのも忘れて夢中になったが、互いに戒めて道に戻り、行逢川を渉って腰越に行った。これまで崑崙は途中へとへとになって何度か行李を放り出そうとしたくらいだが、ここへ来て甚く元気になり、貝だの沙鉄だので行李を一杯にした上、なお拾いながら歩いた。しかし、行逢川に来て、草履のみならず脚絆まで泥沙に没するに及び、ほとんど足枷をはめられたような有様になった、珍しいものを見てすっかり満足したせいで疲れを忘れてしまったのだ。

先レ是ヨリ山生憊ル。欲スルレ棄テント二行李ヲ一者数次ナリシニ、縁リテ三疇昔ノ覧古、投スルニ二其ノ所ニ一レ好ム也、此ノ日豪ナルコト甚ダシ。併二掇シテ璣貝鉄沙ヲ一、半バニス二其ノ行李ニ一。且ツ掇シ且ツ歩ス。渉ル二行逢川ヲ一。水没ス二其ノ屩ヲ一。及ビ二乎行縢ニ一、而沙益深ク、水沙相粘ジ、脚重キコト如シレ帯ブルガレ鈇ヲ。以テ三目飫クヲ二非常ノ之観ニ一、忘ル二其ノ勞ヲ一耳。(遊湘)

左側の崖が海に突き出たところが小余綾(小動)である。右に回って腰越の漁村に入る。磯臭いので鼻を蔽って通り過ぎる。腰越は鎌倉の都門だ。満福寺を訪ねた。寺僧の話に、所伝では源義経が平氏を滅ぼし、宗盛をとらえて帰り、ここまで来た時、頼朝が通行を許さず、鎌倉に入ることができなかった。そこで大江広元に書を送り、自らの寃を訴え、弁慶に書かせたという。ここがその場所である。昔の宿駅の建物は寺の後ろにあったのだろう。弁慶の書いた手紙が今も本寺にあると云々。春台は聞きながら、むろん手紙など贋物だと分かったので、見たいとも所望しなかった。庭には石泉があり、弁慶が硯の水を取ったところであるという。さて満福寺の西が龍口寺である。ここは日蓮が囚えられて処刑されようとした場所を後に寺としたもので、ここにも土牢があるという。われわれはもう土牢を見るのが嫌でもあり、先を急いだ。足が重い。東野が崑崙を振り返ると、先ほど拾った貝や石をとうに棄ててしまっていた。腰越の西にまた漁村があり、偏湍(片瀬)という。その西は平沙が広大に広がっている。そのまた西を砥上(とがみ)といい、どれも名勝であるが一望に見渡される。腰越の人家は水涯から百歩と離れていない場所にあり、南に画島(江ノ島。江島(「行記」))が望見できる。

顧ミレバ二山生ヲ一、則チ棄テテ二其ノ所ヲ一レ掇フ久シ矣。(遊湘)

画島はここから三里と離れていない。潮が満ちれば舟で渡り、潮が引けば歩いて行くことができる。水が深ければ着物をからげ、浅ければ裾をたくしあげて、状況に応じて徒渉する。また、駄壮夫(人足)があり、肩に人を担いで渉り駄賃をかせいでいる。素裸で渡し場に群集し、わいわいがやがやと客引きに余念がない。春台たちが渡し場に来たとき、ちょうど潮は引いていた。だが水に不馴れなうえ、肌脱ぎになるのも嫌だったので、皆肩に担いでもらった。そんなわけで水が深そうに見えたところも楽に進むことができたが、無事渡りきるや、さらに上乗せの駄賃を要求してきたので、聞かぬふりをして過ぎた。まことに鄙しい者たちの貪欲さは限りがなく、憎むべきものである。渡し口を出ると、左右どれも漁師の家ばかり。すぐに山に登った。店が隙間なく並んでいる。中腹に天女祠(弁才天)があった。これを下祠(下社)と呼んでいる。これは応永年間、慈悲上人と号した僧良真が実朝の命で建てたもので、弘法大師の刻んだという天女像を安置する。左折してさらに石段があり、大きな青石がある。福石という。さらに道らしきところを

通る。左は岸壁が数十丈切り立っている。鎌倉が見えた。右手は樹木がまばらに生えていて、所々に鑪(小屋掛の休憩所。権店(「行記」)があり旅人がひと休みできるようにしてある。二里ばかり行くと山頂に楼門があり、竇(潜門)のようにして入るのがちょっと雅趣がある。入ると大きな天女祠があり、これを上祠(上社)という。仁寿年間、慈覚大師(円仁)の建てたものという。大師が刻んだという天女像がある。

華表があり、金亀山とある。これは養和年間に頼朝がこの島に建てたものである。ここを過ぎて道は下りになり、右手にさらに天女祠があるが、これは近ごろ建てたもので、結構は上社・下社に及ばない。恐らくこの島では元来龍穴を神の住処と考えていた。そして、上弦の後、下弦の前、大潮になると、人はそこへ行くことができなかった。そこで神をここに祀ったのだ。したがって、これが正しく本来の天女祠なのである。だから、龍穴と上下の弁才天と石碑とはそれぞれ別物なのだ。さらに左に旋り、山を回って西南に行くと道幅が狭くなり、左は岩肌が切り立ち、岩の途切れたところに紺碧の水がのぞいているのが恐しい。ここを過ぎて左に曲がり、石段を下りると、険しい断崖が深淵に臨み、瓦礫の道になる。足を竦めることもしばしばである。瀧のようになったところの右に小さな石段があってこれをよじのぼってまた降りると二十歩ほどの大きな石床になって横木が渡してある。左の中岩の中ほどに龍穴がある。穴の正面は二丈ばかりで南に向き、広さは一丈ほどあり、高さも同じくらいある。水が集まるところは、石を踏みながら入ることができる。穴の中は鴿(鳩)がたくさんいて、人に糞を墜すので避けなければいけない。十余歩ほど入ると、ようやく狭くなるところに壇を築いて上に小さな祠を建ててある。ここが天女の棲むところである。一人の僧侶がいて香を手向けている。この先、穴はますます窄まり、また暗くなるので、燭を持たなければ入ることができない。下僕が一人いて、炬火を持って客を案内する。三人は金を払って案内を頼んだ。岩角が突き出て、雫が滴り、歩きづらく、身を屈めて入っていくが、ますます狭くなる。両側に石仏が累々と数知らず置いてある。下僕は一々燭を掲げてそれを見せ、来歴を物語るが厭うべきものばかりだ。四十歩ほど入ったところで道は二つに分かれた。右が胎蔵界、左が金剛界である。それぞれ二十歩余り行くとどちらも大日如来の像を安置してあった。それから先はいよいよ狭くなり、匍匐してやっと入れるほどである。だから入った者もなく、どこまで続いているのかも分からないという。三人ともここで戻ることにした。そもそもこの龍穴は、伝説では昔龍が出た。そして島は天女の棲む島だった。弘法大師がここに天女を祀ってから、人はここを天女の棲処とした。鎌倉の盛時には雩(雨乞い)をここで行った記録が東鑑に見えるということを聞いたことがある。海に面した諸州では山の根方に穴の開いていることがよくある。皆大昔、人が開けたもので、これもその類であろう。これを神と見なせば神、妖異と見なせば妖異となる。神異ならばそれでよし。石仏を売り物にする店とは何事か。

巌穴を出てひと休みしていると、子どもが一人座って釣をしている。よく饒舌る子で、自分たちに洞窟についてあれこれ説明してくれた。我々が戻るとき、子どもも釣をやめて帰り支度をした。道々話しながらもとの道に戻り、休憩所まで来ると子どもが言った。自分は休憩所の晩をして茶や貝細工・海藻類を売っている。しばらく休んでいらっしゃいと。勧められるままに茶を飲み、貝細工を買って出た。それで釣をやめたのか。大の大人が揃いも揃って子どもの術中にはまって気づかなかった。子どもは大漁だったなあ。他に碑などはないかと尋ねると、そんなものはないと答えた。まあ、見るべきものはこのくらいのものだろう。上社・下社を通って客舎(旅籠)で午食をとる。話の分かりそうな僧がいたので、この辺りに碑などはあるでしょうかと尋ねると、そんなものはありませんという。そこで、墓表のようなもので壊れたようなものがありませんかと聞き直すと、僧はなあんだという顔をして大笑いして言った。それならありますよ。あなたたちが蛮夷の語(異國の言葉)を使うから分からなかったのだ、と。その傍の古碑のありかを教えてくれた。碑は良真が渡宋し、慶仁禅師に会ってこれを将来したという、高さ六尺強、幅三尺あまり、厚さ五寸で、額には大日本国江島霊迹建寺之記の篆書があり、すべて剥落もせずに残っている。書き振りはすばらしいが、文字が読みづらい。雲龍で縁取りしてあるのもとても精巧なものである。碑面は楷書だが、すでに剥落し尽くし、所々数字を読みうるに過ぎない。下の小楷も上下が剥離し、胴も横に罅が入っている有様である。希代の珍物であるのに、敗壊してその全きを見ることのできないのが残念だ。近ごろ有識者がこれを継ぎ接ぎして建て直したという話を聞いたので、まっさきにこれについて尋ねてみた。しかし、年寄でこれを知っている者はいず、多少文字が読めてもこれが何物であるかを知る者がいない。いろいろ尋ね回ったが、ついに分からなかった。島人は神の恵みに馴れきって、不文の者ばかりだ。春台は憤慨していた。古雅な文字に感心した崑崙が碑文を写そうとすると、東野がそれは鎌倉志に図が出ていると言ったので、止めた。崑崙が鮮魚が置いてあり、酒の肴によい。しかし宿は汚らしく、蠅が多い。そそくさと食ったせいで少しもうまくなかった。酒をとも思ったが、すっかり興醒めしてとうとう止めた。食い終わるや旅装を整えて出た。いやとても画島は行楽の場所ではない。初めの予想では、島の周囲は十里もなく、高さもほどほどだが、ごろごろとした石の山が海中に屹立してそれが趣味のあるところだ。一日訪れたくらいで見尽くせるだろうか、と思った。さて実際に山を巡ってみると、確かにそうだった。ただ残念なことにその神は福を司る神であり、そのために山はその名勝を擅にすることが

できないのだ。ああ、神は福を得れば堕落し、人は福を得れば鄙しくなる。山だけががんばってみても難しかろう。我々の興が醒めたのは、何も蠅のせいだけではない。帰る頃に潮が満ちてきたので、帰りは舟で渡った。

片瀬から北に田野を十里ほど行くと藤沢の宿だ。崑崙は上京の折、この宿を通ったことがある。今年の大風(台風)で、道のあちこちに倒木が散らばっていた。新街駅の右手には一本の老松が吹き倒されていたが、中はすっかり焼け焦げているのに、外の枝と樹皮はそのままだった。これは雷撃のために焼けたものと見える。ところが地元で聞くと、風で折れた後にこうなったのだという。こんなことは古い本に書いていない。旅にあってこそ見聞できることだ、と東野は感心した。東野と崑崙は清浄光寺に寄り、小栗判官の墓を探訪したが、春台は以前来たことがあるので同行を断わり、直行して茶店で待っていた。しばらくすると二人がやって来た。ここで崑崙は馬に乗ることにし、他の二人は徒歩で先に行った。十塚(戸塚)の宿に着いたが、崑崙の馬がなかなか来ないので茶店で待った。ずいぶん経ってから馬がやって来た。春台が「遅いぞ。」と言うと、崑崙は下馬して言う。「馬が遅いのでなく、御二人が早過ぎるのです。もう晡時(午後四時過ぎ)を回っていたので、春台は言う。「己達もすっかり疲れたが、まだ歩ける。この宿は江戸から一日の行程だ。ここで馬を捨てて泊まったら、明日はもっと疲れてしまう。このまま進んで程谷(保土ケ谷)まで行って下りたらどうか。」二人は「分かった。」と言って、三人はそのまま進んだ。崑崙はまた馬に乗った。この道は昇り降りがきついが、東野はすこぶる元気で春台でも追いつけない。崑崙はしまいまで追いつかなかった。東野と春台が程谷の新町に着いた頃にはもう星が見えた。宿に旅装を解き、足を洗って帯を緩めて横になった頃、崑崙がやって来た。春台はもう画島ですっかり興醒めしたうえ、日暮れ時の道を歩いて疲れてしまった。それのみか、宿は退屈で殺風景極まりない。この旅行もここまで来るともう早く帰りたくなった。濁り酒でわずかに疲れを癒やすことにした。崑崙はというと懐手をしてぼけっとしている。東野は春台と杯を差しつけて言った。「君は約束に背いて馬を使ったのだから、罰として一杯飲め。」崑崙は笑って答えた。「もちろんです。けれどもあなた方も雅楽の稽古に間に合わなかったではありませんか。一日も無駄にしないという約束はどうなったんですか。」三人とも大笑いして互いに罰し合った。画島も坂東三十六所に下るとはいえないが、だいぶ俗子されて碑一つ知る者もない。天下は利欲に趨る者ばかりで、鎌倉の古墓も半ばは贋物だが、まあしかたがない。皆で雪ノ下の主人の温情あるもてなしのことを盛んに話し合った。

余與二藤生一先行シ、抵ル二十塚山一。山生ノ馬遅ル。二人俟ツ二諸茶肆一。久シウシテ之ヲ乃チ至ル。余曰ク、遅シ矣哉ト。山生下リテ馬ヨリ曰ク、非ズ二馬ノ不ルニ一レ進マ也、二子健ナルナリ也ト。時ニ已ニ過グ晡ヲ。余曰ク、吾儕實ニ疲レタレドモ、而猶ホ可シ行ク。此ノ驛去ルコト二東都ヲ一一日程ナリ。舎テバ馬ヲ則チ舎テヨ矣。奈ニ明日之勞ヲ一何セン。不ト若カ三進ミテ舎ツルニ二程谷一。二子皆曰ク、善シト。遂ニ行ク。山生又乗ル馬ニ。是ノ道也高下崎嶇タリ。藤生甚ダ健ナリ。余スラ且ツ弗レ如カ。山生終ニ不レ及バ。二人抵レバ二程谷一、則チ見タリ星ヲ矣。就キ舎ニ釋キ二行装一、洗ヒ足ヲ緩メテ帯ビヲ而臥ス。然ル後山生至ル。

(湘中)

山生袖ニシテ手ヲ仰グ屋ヲ。余ト與二太宰一、引キテ二一爵ヲ一属シテ生ニ曰ク、公既ニ背ク約ニ。請フ罰セント二一爵ヲ一。蓋シ山生此ノ日跨ガレル馬ニ也。生笑ツテ曰ク、固ヨリ也。然レドモ公等能ク及ベル二肆楽ノ之期一乎。其レ如二不ルノ一曠シウ日ヲ之約ヲ一何セント。乃チ大笑シテ相罰ス。(遊湘)

二八日、朝早く程谷を出発した。皆旅の興も醒めて、そそくさと帰る。品川まで来た頃は、昳(日没時)だった。飯屋で食ひ、飲み屋で飲み、元気が出て来たので春台は言った。「今度の旅で良かったものが三つ、つまらなかったものが三つある。」二人は何のことかと尋ねる。「景勝地に行って古迹を観たことが良かったものの一つだ。雨が止んで天気が穏やかで雨に降られなかった、これが二つめ。三人ともいろいろ歩き回ったが無事に帰れたこと、これが三つめだ。良くなかったほうは、日程が限られていて、のんびり回れなかったことが一つ、秋元と平野がうそを吐いたのと朝比奈が足を患ったことが二つめ、酒を携えなかったことが三つめの欠点だ。」東野は言った。「それはそのとおり。でも画島から始めたならどうだったかな。」春台は答えた。「その方が順当だっただろう。けれども、良い事があれば悪い事もある。これが物事の常だ。けっきょくは天運の然らしむるところ。崑崙の言うとおり、天は二物を与えずというやつさ。」春台はそう言って、崑崙と詩を賦して、以下酒になった。三人ともすっかり酔っ払って、それからさらに歩いた。そうして薄暮になって城北の家に帰った。その晩、雨が降り出した。春台はもう一つ儲けた気分になった。この旅で春台が賦した詩は一九首、別記として載せた。

(21)『湘中紀行』原文は「晁蔚宗」「晁生」である。『遊湘紀事』にも「晁生」とあり、『鎌倉行記』には記載

がない。徂徠門で晁姓を名乗るのは朝比奈文淵と朝比奈（朝夷奈）南山があるが、南山は崑崙より年歯が若い。宇佐美灊水『蕤園録稿』に徂徠が安藤東野・服部南郭・晁蔚宗・太宰春台と共に灊水を訪ねて詩を賦したとあり、『遊湘紀事』には鎌倉行を果たさなかったのは足を病んでいたためだと断わってある。崑崙に比べ、東野と春台が親しく「晁生」について書いていること、また『湘中紀行』に春台が崑崙を一行の最年少としていることなどから、恐らく文淵の別号かと思われる。因みに、『後漢書』を撰した范曄の字が蔚宗だというから、これに親炙している記事などがあればさらに明確になるだろう。長澤孝三編『漢文学者総覧』（汲古書院　一九九二・三　第四刷）にも「晁蔚宗」の記載はない。